

〔成績〕 正常者(10例)は23~36%(31.01±3.86%)に分布し、甲状腺機能亢進症(16例)39~58%(48.20±5.46%)、単純性びまん性甲状腺腫(7例)24~35%(30.11±3.63%)、悪性甲状腺腫(7例)20~34%(28.79±4.75%)、結節性甲状腺腫(36例)21~37%(29.36±3.94%)機能低下症(5例)17~24%(21.09±2.75%)であった。

亢進症と正常者との重なり合いはなかった。単純性びまん性甲状腺腫は正常域に分布し、悪性甲状腺腫、結節性甲状腺腫は正常域あるいはやや低値を示し、低下症は24%以下に分布したが正常者との重なり合いもわずかに認めた。resin 摂取率と¹³¹I 甲状腺摂取率とは、よく平行した。

基礎代謝率と resin 摂取率とは、亢進症ではよく平行したが、その他の疾患では resin 摂取率に比し高値を示すものも数例認められた。機能亢進症手術例6例(全例亜全剥術)では、術後各症例とも resin 摂取率は漸減し術後7日目では平均8.2%の resin 摂取率の減少を認め、手術効果は明瞭と考えられた。

悪性甲状腺腫5例(全例半側葉切除術)では、resin 摂取率は術直後一旦低下するが、術後1日目より回復し始め、3日目で上昇のピークを示し、5~7日目より術前値に近くなる傾向を示した。

結節性甲状腺腫22例(20例核出術、2例半側葉切除術)では、resin 摂取率は術直後より3日目まで上昇し、5~7日目でほとんどの症例は、ほぼ術前値と同じかやや高値を示した。

以上より、術後TBCの変動は、疾患の種類および手術手技の違いも関与するものと考えられる。

質問: 伊藤国彦(伊藤病院) バセドウ病36例の術前後のtriosorb値について検討した。BMRはかなりばらつきがあり、とくに手術前日の値は半数以上は+40%以上であった。triosorb値はBMRより明らかな傾向を示し、とくに手術前日値は2例を除いて42%以下であった。手術時期の判定に対しtriosorb testは有用である。

*

28. TSH, T₃投与によるTBCおよびResin Sponge Uptake値の変動

速水四郎 仁瓶礼之 後藤宗治 石突吉博
(名古屋大学日比野内科)

TSHおよびT₃を投与して甲状腺機能状態に変動を与

えたさい、TBCならびにResin Sponge Uptake(RSU)が平行して変動するか否か、またこれらの薬剤による甲状腺機能の変化をこれらの指標に代えることができるかについて検討を行なった。TBCはセルローズアセテート膜(セパラックス)を用いて電気泳動を行ない、田中らの方法に準じてラジオオートグラフ作製のちwell counterで測定し、PBIはGrossman and Grossmanの方法、RSUは25°C、60分のincubate後測定した。

1) TBCは機能低下症では高値を示し、正常人と機能低下症との間に重なり合いがみられた。RSUは機能亢進症では高値を示し、正常人と機能低下症との間に重なり合いがみられた。TBCからPBIを除いた不飽和TBCは各群の重なり合いが少なくなり、機能亢進症では低値を示し、TBCの大部分が血中サイロキシンと結合していることを示した。

2) 不飽和TBCとRSUとの間には明らかに有意の逆相関がみられた。

3) TSH(サイロトロパール)10usp注射後、¹³¹I摂取率、PBIの反応をみた群ではTSH投与前後における不飽和TBCとRSUとの間の回帰直線係数に変化をみなかつた。

4) TSHに反応をみた群ではTBCの減少傾向、PBIの増加をみ、RSUに増加の傾向をみたが有意の変化はみられなかつた。

5) 正常人にT₃100μg1週間投与した後ではTBCの増加傾向、PBIの減少傾向をみ、RSUの減少をみた。

TSH1回投与で¹³¹I摂取率およびPBIの増加をみた例ではTBCの減少傾向をみたが、RSUには有意の増加が認められず、TSH testとしては従来の方法に優れているとは思われなかつた。正常人においては、TSH投与前後において、不飽和TBCとRSU値との回帰直線係数に差がみられなかつた。

質問: 浜田 哲(京都大学三宅内科) TBPAとresin sponge uptakeとの関係について検討したか。今後この検討が必要と考えられる。

答: 速水四郎 プレアルブミン結合サイロキシン量について検討を行なっていない。

*